

応募前に
チェックしよう！

選考委員の視点～作品をブラッシュアップするために～

京都文学賞の選考委員（書評家等の一次選考委員や読者選考委員）の方々からいただいた選考後の感想の中で、作品の執筆や応募に当たって参考となるコメントを抜粋しました。ご一読いただき、作品の質を向上し、受賞を目指してください！

（原稿の書き方について）

- ・ 原稿の表記方法が正しくない作品が多かった。
- ・ 40,000 字以上などある程度の分量の作品は章割りして欲しい。文学賞応募作品を読みなれた選考委員であっても、それほどひと息では読めない。

（推敲について）

- ・ 推敲することで、必ず作品の完成度を上げることができる。最低一度、できれば二度、そして三度目は音読してみたい。

⇒ 作品の内容が重要であることはもちろんですが、原稿の体裁がきちんとしていると、選考委員の印象も良くなります。

【原稿様式】

京都文学賞では、原稿様式を指定（A4、横長、マス目なし、30 字×40 行、縦書き）しています。また、中高生部門のみ手書き原稿でも OK としています。

手書き原稿用紙での表記方法は、以下に特にご注意ください。

- (1) 段落の冒頭は 1 字空けて書く。
- (2) 改行して新しい段落に入った場合 1 字空ける。（会話文の始まりの「は 1 字空けない。）
- (3) 行の一番上のマスに、。 」などは入れない。1 行前の行末マスの文字に重ねて入れる（「っ」「ゃ」「ゅ」「ょ」「ー」などは、行の一番上のマスにあってもよい）。

※ (1)、(2)は原稿用紙以外の表記も同様です。

また、読みやすさの観点から慣行として、以下の記載方法としている作品が多いです。一般部門の方も含めて、原稿作成に当たって参考にしてください。

(1) かぎかっこの「閉じ」の直前には句読点を置かない。

○「おはよう」

×「おはよう。」

ただし、「閉じ」の直前でなければ、自由に句読点を使うことができる。

○「おはよう。調子はどう？」

また、「!」「?」などの記号については、「閉じ」の直前にも使用することができる。

○「おはよう！」

(2) 「!」「?」などの直後に全角スペースを入れる。

○ なんと? そんな馬鹿な!

× なんと?そんな馬鹿な!

ただし、かぎかっこの「閉じ」の直前に「!」「?」を使った場合、全角スペースは入れない。

○「なんと? そんな馬鹿な！」

×「なんと? そんな馬鹿な! 」

(3) 三点リーダとダッシュは2つ繋げて使用する。

○「なんと……、そんな馬鹿な——」

×「なんと…、そんな馬鹿な—」

(タイトルについて)

- ・ タイトルを見ても、どんな内容だったか思い出せない作品が多かった。タイトルは作品の顔。たとえ刊行時に改題される例が多くても、既成作品とは違う、自分はこういう顔だと主張する心意気が欲しい。
- ・ 本を手にとるとき、1番最初に見るのはタイトル。タイトルが、その小説を読むか否かを定める大きな要素の1つになる。どんなに素晴らしい作品でも、まずは読者に手にとって読んでもらわなければ始まらない。タイトルで読者に「読んでみよう」と思わせて欲しい。
- ・ タイトルに惹かれて小説を選ぶこともあるので、タイトルにもう少しこだわりが欲しい。インパクトに欠けており、タイトルと物語の結びつきもはっきりとしない作品も多かった。タイトルの重要性をもっと大切にして欲しい。

⇒ タイトルの重要性を訴える選考委員の方がとても多かったです。ご自身の作品に相応しく、かつ、読者に「読みたい」と思わせるタイトルをじっくりと考えてください。

(「京都」を題材とすることについて)

- ・ 京都のイメージが画一的。人が「京都」に抱く（比較的安直な）イメージを反映した結果であるように感じる。
- ・ 京都を憧れの町として見てしまうと、表層的な捉え方になってしまう。もっと地の京都、平熱の京都を体験して欲しい。

⇒ 最終選考委員、アンバサダーの皆様からも、「あなたにしか紡げない」「誰も知らなかった」「唯一無二の」「新しい」京都を読みたいとのコメントをいただいています。皆さんの創造力を発揮して、独自性のある作品をお寄せください。

最終選考委員・アンバサダーの皆様からのコメントはこちら

<https://kyotobungakusyuo.com/ambassador>

(リサーチと仕上げについて)

- ・ 自身の経験を踏まえたり、深いリサーチを行うことで、作品に説得力が出てくる。
- ・ 資料・文献については、引用したものはもとより、参考にしたものがあれば、記載するべきと感じた。
- ・ 京都の歴史文化をよく調べてある作品が多い一方、時代背景を長々と書き過ぎて肝心の小説の面白さがなおざりになっている作品も少なくなかった。
- ・ 歴史ものでは、論文のような「調べたことのレポート」の域を出ない作品が多くあった。「調べる」はスタート地点。そこから人間のドラマを創作していくのが小説の醍醐味。
- ・ ストーリーの面白さが欠ける作品は、登場人物の作り込み、ストーリーに無駄がないかといった点を工夫すれば、より深みが出るように思う。
- ・ 終わらせ方が少々雑な作品も見られた。

⇒ 基礎的な調査は大変重要であり、資料・文献を参考とした場合に明示することは必要です。それを基盤に、ストーリー、設定、人物、描写などを工夫して、小説というかたちにしていくことこそが、大変な作業ですが、面白いところだと思います。創作の醍醐味を最後まで味わって皆さんの作品を仕上げてください。

(参考) 引用・参考文献の書き方

- 引用の書き方

本文中で引用する場合は、かぎ括弧をつけるなど、自分の著作物と引用部分がはっきり分かるように区別する。また、引用箇所に(注)を付け、巻末に出典(書名、著者名、出版社名、出版年、該当ページなど)を明記する。

- 参考文献の書き方

巻末に出典(書名、著者名、出版社名、出版年など)を明記する。

著作権について、詳しくは文化庁のホームページ「著作権が自由に使える場合」を参照してください。

*文化庁「著作権が自由に使える場合」

https://www.bunka.go.jp/seisaku/chosakuken/seidokaisetsu/gaiyo/chosakubutsu_jiyu.html